OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中古・中世散文作品における「カクテ」、「サテ」の機能の差異
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	詞林. 2019, 66, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73437
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/73437　　詞林　第66号　2019年10月

中古・中世散文作品における「カクテ」、「サテ」の機能の差異

百瀬　みのり

一．はじめに

本論は中古・中世散文作品における「カクテ」と「サテ」の機能の差異について実証的に述べることを目的としたものである。指示副詞の「カク」や「サ」に接続助詞「テ」の付いた語構成を持つ「カクテ」、「サテ」は副詞、接続詞、感動詞などとしてはたらくが、先行研究では両語の機能の類似性が多く注目され、その差異性について触れられることは少なかったという経緯がある。そこで、本論ではその差異性についても注目し、「カクテ」、「サテ」の類似性と差異性について用例より偏りなく述べることで先行研究を補完することを目指す。

二．先行研究と問題の所在

「カクテ」、「サテ」はその形態や機能の類似性から、渡瀬茂（一九八一）、糸井通浩（一九八七）、西田隆政（一九九九、二〇一〇）、岡崎友子（二〇一一）などが議論をしてきた。渡瀬、糸井、西田は物語の叙述の方法や文体との関わりから「カクテ」、「サテ」について論じている。また岡崎は両語の指示詞から接続語への展開を通時的に述べている。これらの中で特に「カクテ」、「サテ」の差異を取り上げたのは糸井（一九八七）である。この中で糸井は「カクテ」と「サテ」の両語を、中古の歌物語作品中での和歌との位置関係において考察し、「カクテ」が和歌の後に、「サテ」が和歌の前に置かれていることに注目し、「節目節目を示していく接続語『かくて』に対して、（略）具体的にどんな反応や行動をとったかという関心事を叙述していくところで『さて』とあらたまって見せる」（糸井・同、九一頁）という叙述方法の違いを述べている。これは「カクテ」、「サテ」の用例の一部が示す個別的な特徴を示した大変貴重な指摘である。そこで本論はそれを踏まえ、①「カクテ」、「サテ」の機能の差異を用例から実証的に述べ、さらに②「カクテ」、「サテ」の機能の差異が何に

起因しているのかを述べることとし、先行研究を補完したい。

三．接続助詞「テ」について

まず両語の語構成を確認しておく。

「カクテ」、「サテ」は共に、指示副詞「カク」、「サ」に接続助詞「テ」が付いた形をもつ。岡崎（二〇〇二）は中古の指示副詞「カク」は照応用法と直示用法が、同じく中古の指示副詞「サ」は照応用法と観念用法がその主な用法であるとする。[1]また、接続助詞「テ」について山口は『古代接続法の研究』で、「「て」の接続表現における最も基本的な意味関係は並列性であり、継起性・共存性も、そのうちどちらかが常に並列性と両立する点で、並列性の関係に次いで基本的であるといえる。」（同二六八頁）とした。さらに山口は「それ自体としては関係表示にきわめて消極的であるが、だからこそ、それを手段として活かせば、逆にどのような意味関係をも文脈に依存するかたちで表せるというのが、「て」の接続形式としてのいわば個性であったということができる。」（同二六九頁）と述べる。さらに「て」は、「修飾句として、状態・手段・方法などを表す。」（『角川古語大辞典』「て　接続助詞」の項、五〇四頁）ともあり、これらより接続助詞「て」には状態を表す副詞節を構成するはたらきがあると考えられる。これらの考えに則り本稿も、「カクテ」、「サテ」は指示副詞「カク」、「サ」に接続助詞「テ」が付いて、「カクテ」、「サテ」となり副詞節を導くようになった形式として考えることとする。

四．「カクテ」、「サテ」の通時的な状況

四．一．中古・中世の「カクテ」、「サテ」（用例数の状況）

まず、中古・中世散文作品中の「カクテ」と「サテ」の用例数を確認する。（表一）～（表四）は中古・中世散文作品中における「カクテ」、「サテ」の用例数である。用例は「カクテ」、「サテ」が文に現れる位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】の別に示す。なお、ここで【非地の文】とは【対話文】、【心内話文】、【消息文】を指すものとする。また、作品名は表中では略して示し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『うつほ』は『うつほ物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は、『浜松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とりかへ』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平家覚一』は『平家物語』・覚一本、『平家天草』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言集』を指す。（以下同。）これらの作品は、中古・中世に成立したとされる散文の物語作品を中心に選択したものである。用例は「カクテ」、「サテ」に注目するもので、「カクテモ」、「サテハ」

（表一）中古散文作品中の「カクテ」の用例数

位置 / 資料	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『大和』	35	2	0	3	40
『平中』	4	0	0	1	5
『うつほ』	453（2）	8	1	65	527
『落窪』	14	1	5	10	30
『枕』	0	0	0	2	2
『源氏』	20	19	15	62	116
『堤』	0	0	0	3	3
『浜松』	2	2	2	23	29
計	528	32	23	169	752

（表二）中世散文作品中の「カクテ」の用例数

位置 / 資料	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『住吉』	3	0	0	1	4
『とりかへ』	1	2	3	24	30
『保元』	5	1	0	1	7
『平治』	2	0	0	1	3
『平家覚一』	17	1	6	5	29
『平家天草』	0	1	0	1	2
『狂言集』	0	0	0	0	0
計	28	5	9	33	75

（表三）中古散文作品中の「サテ」の用例数

位置／資料	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『大和』	38	0	1	0	39
『平中』	35	5	4	0	44
『うつほ』	33	7	105	25	170
『落窪』	4	1	16	3	24
『枕』	27	7	8	2	44
『源氏』	17	11	39	36	103
『堤』	0	1	5	0	6
『浜松』	2	1	4	5	12
計	156	33	182	71	442

（表四）中世散文作品中の「サテ」の用例数

位置／資料	地の文・文頭	地の文・文中	非地の文・文頭	非地の文・文中	計
『住吉』	28	0	3	2	33
『とりかへ』	0	1	4	11	16
『保元』	0	0	4	3	7
『平治』	4	0	1	0	5
『平家覚一』	29	1	34	5	69
『平家天草』	44	3	27	2	76
『狂言集』	0	0	92	1	93
計	105	5	165	24	299

（表五）中古・中世の「カクテ」、「サテ」の用例数の比

「カクテ」用例数	「サテ」用例数	用例数の比
中古・「カクテ」752	中古・「サテ」442	1.7：1
中世・「カクテ」75	中世・「サテ」299	1：4

などの「カクテ」、「サテ」に係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

以下、用例は『天草版平家物語』は『天草版平家物語対照本文及び総索引本文篇』、それ以外の作品は全て『日本古典文学全集』（小学館）から採り、頁数は該当する用例の掲載されている頁を表す。傍線は全て論者による。

（表一）～（表四）の「カクテ」、「サテ」の用例数の合計を時代毎に比較したものが（表五）である。

中古では「カクテ」が「サテ」に比して1・7倍使用されているのに対し、中世では「カクテ」は「サテ」の1／4の使用となっている。

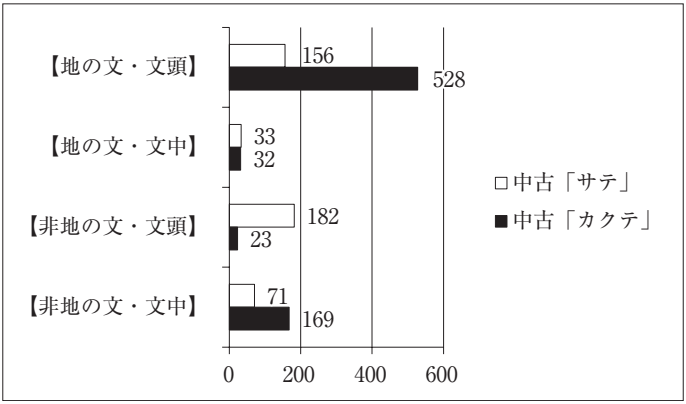
これより、「カクテ」は中古、「サテ」は中世でより使用されていることが分かる。さらに、用例数の比より両語の使用を比較すると、「サテ」の中世における使用が著しいことも観察できる。

これについてさらに詳しく見るために、両語が現れる文の位置という観点を採用して考えることとする。（グラフ一）は、中古と中世における「カクテ」、「サテ」の使用の、それが現れる文の位置別の状況を表したものである。

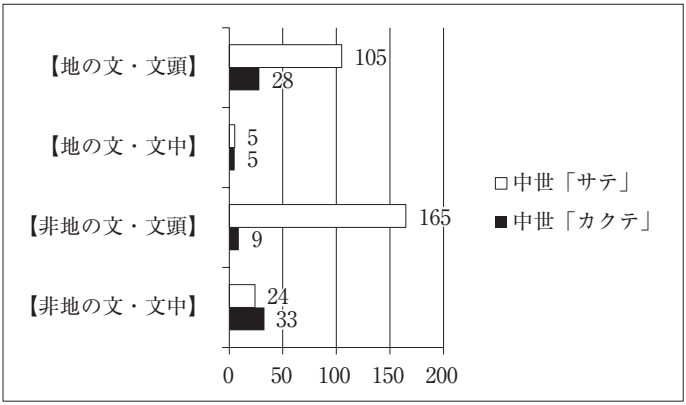
四．二．中古・中世の「カクテ」、「サテ」（現れる文の位置別の状況）

中古では「カクテ」が「サテ」より使用されていたことを先に確認したが、（グラフ一）より、【非地の文・文頭】にお

（グラフ一）中古の「カクテ」、「サテ」（現れる文の位置別）



（グラフ二）中世の「カクテ」、「サテ」（現れる文の位置別）



※（グラフ一）、（グラフ二）共に、グラフ内の数値は用例の実数を表す。

いては「サテ」が「カクテ」の約八倍（「カクテ」23：「サテ」182で、約1：8）使用されていることが分かる。

さらに（グラフ二）より、【地の文・文頭】と【非地の文・文頭】において、同じく「サテ」が「カクテ」の【地の文・文頭】で約四倍（「カクテ」28：「サテ」105で、約1：3・8）、【非地の文・文頭】で約一八倍（「カクテ」9：「サテ」165で、約1：18）使用されていることが分かる。

このように、「カクテ」、「サテ」が現れる文の位置に着目すると、「カクテ」の使用が優勢であった中古において既に、【非地の文・文頭】においては「サテ」が「カクテ」よりも八倍ほど使用されていたことが分かる。さらに、「サテ」の使用が優勢となった中世においては、中古から引き続き、【非地の文・文頭】で一八倍ほども、また【地の文・文頭】でも四倍ほど「サテ」が「カクテ」よりも使用されるようになっていることが分かる。

この変化は、「サテ」の使用環境の拡大と考えられる。つまり、中古では【非地の文・文頭】、言い換えれば【対話文】、【心内話文】、【消息文】などのコミュニケーションのための文において「カクテ」よりも優勢使用されていた「サテ」が、中世になって使用環境を増やし、【地の文・文頭】、言い換えればコミュニケーションのためではない文においても使用されるようになったということを意味していよう。

これを踏まえ、さらに中古・中世における「カクテ」、「サテ」の相関性を詳しく見るために、【地の文】と【非地の文】を総括して、事項では機能の別に着目して「カクテ」、「サテ」を分類することとする。

五．「カクテ」、「サテ」の分類

前項までを踏まえ、ここで「カクテ」、「サテ」の機能について確認しておく。本論では、中古・中世散文作品中の「カクテ」、「サテ」を以下のように機能別に分類する。

①．話の場面に実態としてその内容が存在している「カクテ」、また、その前部に、その実態が語的・文的な要素として文中に示されている対象と、その後部との関係付けを行う「カクテ」、「サテ」。（ここでは文中に示されている対象の部分に、波線を付して示す。以下同。）

①―A．文中に置かれる「カクテ」、「サテ」。

（1）「あはれ。これより帰りなむ。尿つきにたり。いと臭くて行きたらば、なかなかうとまれなむ」とのたまへば、帯刀笑ふ笑ふ、「かかる雨に、かくておはしましたらば、御志を思さむ人は、麝香の香にも嗅ぎなしたてまつりたまひてむ。（『落窪物語』巻之一、六三頁）

（2）わたくしが相伝の主殿忠盛をこよいをのの闇討ちに召されうとあることを伝え聞いてござるほどに、そのなられうずる様を見とどけうとて、かくてまかりいるほどに、（『天

草版平家物語』巻第一、五頁）

（3）「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」（『枕草子』第二七四段、四二五頁）

（4）さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども，都に待つ人どもも，心もとなうござらうずるほどに，まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて，亡者にいとまごいをして，泣く泣くそこをたたれた．草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：されどもさてあらうずることでなければ，そこをたって同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた．（『天草版平家物語』巻第一、七九頁）

この「カクテ」、「サテ」は副詞のようにはたらく。

①―B1．文頭に置かれる「カクテ」、「サテ」。（この「文頭」とは、話者が交替する対話文の文頭以外の文頭を指す。）

（5）二月の二十日あまり、朱雀院に行幸あり。（略）かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。（『源氏物語』少女、七六頁）

（6）御覧じて、さすがにをかしとおぼせども、一世のつつましければ」とて、御返事もなし。かくて過ぐるほどに、姫君の御乳母、例ならぬ心地して、里へ出でにけり。（『住吉物語』上巻、四八頁）

（7）「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」（『落窪物語』巻之一、九三頁）

（8）「此神輿かきかへし奉れや」と衆議しければ、数千人の大衆、先陣より後陣まで、皆、尤々とぞ同じける。さて神輿を先立て参らせて、東の陣頭、待賢門より入れ奉らむとしければ、（『平家物語』覚一本、巻第一・神輿振、八七頁）

この「カクテ」、「サテ」も副詞のようにはたらく。ここに分類される「カクテ」、「サテ」の例は、その前部に「カクテ」、「サテ」の内容が語的・文的な要素として表れていることから、この「カクテ」、「サテ」を副詞とここではしておくが、その機能は接続詞に近いと考えられる。

①―B2．話者が交替する対話文の文頭に置かれる「カクテ」、「サテ」。

〈ここに分類される「カクテ」の例はない。〉

（9）「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。（『大和物語』一五八段、三九四頁）

（10）「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひ給へば、「春日大明神の御鳥井なり」と申す。人多く群集したり。其中に法師

の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、（『平家物語』覚一本、巻第三・無文、二三二頁）

この「サテ」は副詞のようにはたらくが、特に対話の話者の交替を表すマーカー（談話標識）としての機能を示す。

②．「カクテ」、「サテ」が指示する内容が「カクテ」、「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められない「カクテ」、「サテ」。

②―A．その前部までの話の内容を承けつつ、文脈を一旦切る位置、つまり文頭に置かれ、新たな物語、章段、話題などの始まりを示し、話の場を転換させる機能をもってはたらく「カクテ」、「サテ」。

(11) 兵衛の尉、山吹につけておこせたりける。〈和歌・略〉となむ。返しは知らず。かくて、これは、女、通ひける時に、（『大和物語』一一三段、三三七頁）

(12) 子孫の官途も、竜の雲に昇るよりは、猶すみやかなり。九代の先蹤をこえ給ふこそ目出たけれ。かくて清盛公、仁安三年十一月十一日、年五十一にて、病にをかされ、存命の為に忽ちに出家入道す。（『平家物語』覚一本、巻第一・禿髪、二九頁）

(13) 女、〈和歌・略〉などなむ、いひおこせたりける。さりければ、久しくも長居で、帰り来にけり。〈ここまで三五段。〉さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。（『平中物語』三六段、五二二頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例。〉）

(14) 「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扨小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。（『平家物語』覚一本、巻第七・一門都落、八三頁）

この「カクテ」、「サテ」は、文頭に置かれ、接続詞のような機能を示す。

②―B．感動詞のようにはたらく「カクテ」、「サテ」。

〈ここに分類される「カクテ」の例はない。〉

この「サテ」は「さてさて」、「これはさて」、「さていかにせむ」、「まずはさて」、「さてこれわ」、「さてこれは」、「何がさて」などの連語の形式をとることもあり、文中で感動詞などとしてはたらく。

(15) 「男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。（『源氏物語』帚木、八六頁）

(16) 波多野、「尤もさこそ候はめ」とて、太刀を抜き、引きそばめて、近付きければ、少き者ども、太刀の影に驚きて、「これは、さて、実に失はんずるにや。暫し助けよや」とて、（『保

元物語』下、義朝幼少の弟悉く失はるる事、三五七頁）この「サテ」は、感動詞のような機能を示す。

次に、この分類を基に中古と中世の「カクテ」、「サテ」の機能の差異について考えることとする。

六.「カクテ」、「サテ」の機能の差異

これまでの調査を（表六）、（表七）にまとめ、そこから以下のことが分かる。

・（分類項目①―Aより）文中に置かれて副詞として機能する「カクテ」、「サテ」は、中古では「カクテ」が「サテ」の二倍近く使用されている（「カクテ」201例：「サテ」104例で、約1・9倍）。しかし、中世では「カクテ」と「サテ」の使用はあまり差がない（「カクテ」38例：「サテ」29例で約1・3倍）。これは、「サテ」の文中における副詞機能が元来「カクテ」よりも小さかったことを意味すると思われる。また、「カクテ」自体もこの用法では中古と中世で五倍以上の差がある（中古「カクテ」201：中世「カクテ」38で約5・3倍）ことから、中世では「カクテ」に替わる副詞が使用されるようになったが、それは「サテ」ではない、その他の形式であろうと考えられる。これについては稿を改め、考えていきたい。

・（分類項目①―B1より）文頭に置かれて副詞として機能する「カクテ」、「サテ」は、中古では「カクテ」が、中世では「サテ」が優勢になったと思われる。中古では「カクテ」550例：「サテ」249例で「カクテ」が「サテ」の約2・2倍、中世では「カクテ」が36例：「サテ」167例で「サテ」が「カクテ」の約4・6倍の使用が見られる。これは、中古から中世にかけて、「話の内容そのものを場面のように直示的に指示して」踏まえる「カクテ」型の副詞から、「話の進行や展開を文脈として照応的に指示して」踏まえる「サテ」型の副詞が優勢になったことを意味すると考えられる。「カクテ」は直示用法が、「サテ」は照応用法が主用法であるが、「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込む」（金水（一九九九）、六八頁）直示に対し、「言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」（同、六九頁）照応は、言語外世界に既存する対象のみならず、「言語的文脈によって作られる状況」（同、七九頁）にある対象を指し示すことができるので、作品中の人物個人の心内話やそれに基づく仮定などをも指示対象になしえ、それがために、文頭に現れて前文や前文脈を指示して副詞として機能するには「カクテ」よりも「サテ」が優勢になったということであろうと考えられる。

・（分類項目①―B2より）対話文中で、話者交替が見られるときに後発の対話文の冒頭に置かれ、先発の対話文の内容を引き取る機能は、「カクテ」には見られず、「サテ」に見られる。これは「サテ」の主用法である照応用法に基づく機能

（表六）「カクテ」の機能別用例数

※数値はそこに分類される用例数を指す。（以下同。）

時代	中古		中世		計
分類	頭	中	頭	中	
①—A	0	201	0	38	239
①—B1	550	0	36	0	586
①—B2	0	0	0	0	0
②—A	1	0	1	0	2
②—B	0	0	0	0	0
計	551	201	37	38	
	752		75		
合計	827				

（表七）「サテ」の機能別用例数

時代	中古		中世		計
分類	頭	中	頭	中	
①—A	0	104	0	29	133
①—B1	249	0	167	0	416
①—B2	52	0	93	0	145
②—A	33	0	37	0	70
②—B	5	1	99	28	133
計	339	105	396	57	
	444		453		
合計	897				

であると考えられる。[3]

・（分類項目②―Aより）機能別の分類の中で、最も中古と中世の「カクテ」、「サテ」で差異が大きかった項目である。その指示内容が前部に語的要素としては認められないものの、その前部までの話の内容を承けつつ、文頭に置かれ、新たな物語などの始まりを示し、話の場を転換させる機能をもつ「カクテ」、「サテ」は接続詞のように機能していると考えて良いと思われる。中古の「カクテ」1例：中古の「サテ」33例で三三倍、中世の「カクテ」1例：中世の「サテ」37例で三七倍という用例数の差が「カクテ」と「サテ」に見られることから、このような接続詞としての機能は「カクテ」よりも「サテ」に優勢に見られると考えて良いと思われる。この「サテ」の接続詞的用法については、四．二．で述べたように、中古では【非地の文】で「カクテ」よりも優勢に使用されていた「サテ」が、中世になって【非地の文】だけでなく【地の文】でも「カクテ」に優勢して使用されるようになったこと、つまり、「サテ」の使用環境の拡大すなわち、元来口頭語であった「サテ」がその使用環境を拡大し、文章語としても使用されるようになったと見てよいかと思われる。

さらに、分類項目（①―B1）の箇所でも述べたように、「カクテ」の「カク」が、言語外世界に既存する対象を指示するのに比し、「サテ」の「サ」は「言語的文脈によって作られる状況」（金水（一九九九）、七九頁）にある対象を指し示すことができることから、前文、前文脈などを指示して後部に話を関係付けることができ、その汎用性の高さから「サテ」は地の文でも使用されるようになり、その結果として話の内容そのものを指示するのではなく（これは副詞の機能である。）、話の進行や展開などを示す（これは接続詞の機能である。）接続詞としてはたらくようになったのだと思われる。これはまた別の言い方をすれば、地の文が、文頭に接続詞のようにはたらく「サテ」などを置いて文と文との関係付けを行う形で文をまとめるといった文どうしの結束のさせ方が、中世では見られるようになったということでもあろう。[4]

・（分類項目②―Bより）感動詞のようにはたらく機能は「カクテ」には見られず「サテ」の方に見られる機能である。中古の「サテ」6例：中世の「サテ」127例という二一倍以上の用例数の差からは、この機能が中世になってから発達したことが分かる。この機能の「サテ」は中世の対話文に特に増加している。[5]「サテ」が感動詞としてはたらくようになる出発点としての、疑問文（話し手の感動、情意を表す文）との結びつきは、中古の用例からも認められる。[6]初めは（「サテ」＋疑問文の形式をもつ文）という形を取り、後続する疑問文（話し手の感動や情意を表す文）を強調するようにはたらいていた「サテ」は、次第に疑問文ではない文も後続するようになり、「サテ」自体が話し手の感動や情意を表す感動詞としてはたらくようになったと考えられる。[7]

これらを総合すると、「カクテ」と「サテ」の差異は、指示副詞「カク」と「サ」の差異であり、「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込む」（金水（一九九九）、六八頁）直示用法が主である「カク」に由来する「カクテ」に対し、「言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す（同、六九頁）照応用法が主である「サ」に由来する「サテ」の差異であると考えられる。さらに、両語の差異は「カクテ」の「カク」、「サテ」の「サ」という、両語が由来する指示副詞の指示が、言語外世界（「カク」）か、言語的文脈（「サ」）かの、どちらに依存しているかということに起因していると考えられる。

「カクテ」、「サテ」の両語は、指示副詞に由来しているが、この両語が由来する指示副詞「カク」、「サ」の指示は、性質が異なるものであると思われる。この「カク」を含む指示詞のコ系列と「サ」を含む指示詞のソ系列の差異をまとめて、金水は「ソ系列指示詞があくまで言語的文脈に依存しているのに対し、コ系列の使用は、談話主題の指定という、談話に先だって決定される言語外的な話し手の行為に依存している」（金水（一九九九）・七九頁）とする。分類項目①―Ｂ２の「話者が交替する対話文の文頭に置かれる『カクテ』、『サテ』」や、分類項目②―Ｂの「感動詞のようにはたらく『カクテ』、『サテ』」に「カクテ」の例がないことも、これにより説明が可能となる。分類項目①―Ｂ２は、話し手が異なる先行発話を指し、後行発話に関係付ける機能をもつものである。ゆえにそれは、言語外の既存の対象ではなく、別の話者による発話という言語的文脈そのものを指し示す機能を持つ「『サ』テ」によってしか成し得ない。また、分類項目②―Ｂは、話し手の感動、感情によった発話に見られるものであり、言語外世界にある既存の対象とは元来結び付かない。ゆえに感動した話者が行う発話という言語的文脈そのものを指し示す機能を持つ「『サ』テ」によってしか成し得ないと考えられるからである。

七．まとめ

以上、本論で述べたことをまとめる。

「カクテ」、「サテ」の差異を考えるにあたり、まずその時代別の使用状況を見たところ、用例数を比較すると中古では「カクテ」が、中世では「サテ」が優勢であり、その出現環境を確認したところ、中古では【非地の文・文頭】で優勢に使用されていた「サテ」が、中世では【地の文・文頭】と【非地の文・文頭】で優勢に使用されていることが分かった。この事実を基に、本論で扱った用例の全てを分類項目①―Ａ、①―Ｂ１、①―Ｂ２、②―Ａ、②―Ｂの五種に分類した。

分類項目①―Ａ「文中に置かれて副詞として機能する『カクテ』、『サテ』」での「サテ」の文中における副詞機能が元

来「カクテ」よりも小さかったこと、分類項目①―B1「（話者交替のある対話文以外の）文頭に置かれる『カクテ』、『サテ』」での、文頭に置かれて副詞として機能する「カクテ」、「サテ」は、中古では「カクテ」が、中世では「サテ」が優勢になる変化があったこと、分類項目②―Aの、その指示内容が前部に語的要素としては認められないものの、その前部までの話の内容を承けつつ文頭に置かれ、新たな物語などの始まりを示し話の場を転換させる機能をもつ「カクテ」、「サテ」が接続詞のように機能していると考えられること、この機能は元来「カクテ」よりも「サテ」に優勢に認められたこと、分類項目①―B2「話者が交替する対話文の文頭に置かれる『カクテ』、『サテ』」、分類項目②―Bの「感動詞のようにはたらく『カクテ』、『サテ』」に「サテ」の例のみで「カクテ」の例がないことは、これらが言語外に既存の対象を指す「『カク』テ」とは異なる、言語的文脈そのものを指し示す機能を持つ「『サ』テ」によってしか成し得ない機能であるからとまとめた。

そして用例から実証的に、①「カクテ」、「サテ」の機能の差異は、指示副詞「カク」と「サ」の差異であり、「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込む」（金水（一九九九）、六八頁）直示用法が主である「カク」に由来する「カクテ」に対し、「言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」（同、六九頁）照応用法が主である「サ」に由来する「サテ」の差異であると考えられること、また、②「カクテ」、「サテ」の機能の差異は、「カクテ」の「カク」、「サテ」の「サ」という、両語が由来する指示副詞の指示が、言語外世界（「カク」）か、言語的文脈（「サ」）かの、どちらに依存しているかということに起因していると考えられることを述べた。

（注）

（1）岡崎（二〇〇二）。

（2）『うつほ物語』の【地の文・文頭】における「カクテ」の用例数については、『栄花物語』や『源氏物語』の「カクテ」を扱った渡瀬（一九八一）が述べる、「「かくて」によって導き出されるのは、人々の営為とは無関係に厳然と流れる客観的な時間である。」（渡瀬（同）、一七頁）と同様の、接続詞的機能をもつ「サテ」発達以前の時期の、接続詞的機能をもつ「カクテ」による、物語の長編化のための多用と本論では考えておく。

（3）百瀬（二〇一七）。

（4）百瀬（二〇一九）。

（5）百瀬（二〇一八）、五一頁。

（6）「さて何事ぞ」（『枕草子第六段、三八頁』、「さていかがおはします。」（『浜松中納言物語』巻第四、二九九頁）「さてさてをかしかりける女かな」（『源氏物語』帚木、八六頁）など。

（7）百瀬（二〇一八）。

（参考文献）

糸井通浩（一九八七）「中古文と接続語―「かくて」「さて」を中心に―」『日本語学』第6巻第9号、明治書院、八四―九四頁

岡崎友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に―」『国語学』第53巻3号、国語学会、一―一七頁

岡崎友子（二〇一一）「指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ・サテ」を中心に―」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編、くろしお出版、六七―八七頁

神谷かをる（一九八六）「中古語の文と句の連接―源氏物語の頃まで―」『日本語学』ｖｏｌ．15、10月号、明治書院、一三―二六頁

金水敏（一九九九）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』第6巻第4号、自然言語処理学会、六七―九一頁

金水敏（二〇〇〇）「指示詞―「直示」再考―」中村明編『現代日本語必携』『別冊國文学』53、學燈社、一六〇―一六三頁

高橋太郎（一九五六）「「場面」と「場」」『国語国文』二五（九）、五九一―五九九頁〈後に金水敏・田窪行則編（一九九二ａ）『指示詞』日本語研究資料：第1期第7巻、ひつじ書房、三八―四六頁に再録。〉

高橋尚子（一九八五）「中古接続詞の機能と意味―物語文学作品を資料にして―」『愛文』21号、愛媛大学法文学部国語国文学研究会、八―一七頁

西田隆政（一九九九）「指示語「かくて」と源氏物語の段落構成」『国語語彙史の研究一八』、国語語彙史研究会、和泉書院、八七―九九頁

西田隆政（二〇一〇）「源氏物語の地の文における指示語「かくて」の用法について―「転換」の用法の問題を中心に―」『源氏物語の展望第八輯』森一郎、岩佐美代子、坂本共展編、三弥井書店、八五―一一三頁

長谷川哲子（二〇〇〇）「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』105号、日本語教育学会、二一―三〇頁

藤本真理子（二〇〇八）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』九〇、大阪大学国語国文学会、四〇―五三頁

百瀬みのり（二〇一七）「古典物語作品における談話分析―話者交替の位置に現れる「サテ」について―」『詞林』第六十二号、大阪大学古代中世文学研究会、二八―四九頁、

百瀬みのり（二〇一八）「中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立―前文脈を踏まえない「サテ」について―」『詞林』第六十四号、大阪大学古代中世文学研究会、四七―六二頁

百瀬みのり（二〇一九）「中古中世散文作品における転換の「サテ」について―接続詞の「サテ」に向かうものとしての―」『詞林』第六十五号、大阪大学古代中世文学研究会、七九―一〇二頁

山口堯二（一九八〇）『古代接続法の研究』明治書院

渡瀬茂（一九八一）「『栄花物語』正篇における歴史叙述の時間―「かくて」の機能をめぐって―」『国語と国文学』第58巻第9号、東京大学国語国文学会、一二―二三頁

（用例採集資料及び参考資料）

・『大和物語』『平中物語』、『うつほ物語』、『落窪物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『堤中納言物語』、『浜松中納言物語』、『住吉物語』、『と

りかへばや物語』、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『狂言集』以下全て『新編日本古典文学全集』（小学館刊行）に拠った。

・『天草版平家物語』は江口正弘著（一九八六）『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院刊行）に拠った。

・『角川古語大辞典』（一九九四）中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編、角川書店

・検索サイトジャパンナレッジ http://japanknowledge.com/

・国立国語研究所『日本語歴史コーパス（ＣＨＪ）』（コーパス検索アプリケーション『中納言』）

https://chunagon.ninjal.ac.jp/

（最終アクセス日　共に二〇一九年八月二五日）

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）